

新潮文庫

美っつい庵主さん

有吉佐和子 著



新潮社

う あんじゆ
美っつい庵主さん

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 132 J

昭和五十一年七月二十五日 印刷
昭和五十一年七月三十日 発行

著 者
有 吉 佐 和 子

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株式 新 潮 社

郵便 番 号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電話 業 務 部 (〇三)(二六六)五一一
編 集 部 (〇三)(二六六)五四二
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

美っつい庵主さん

有吉佐和子著

新潮社版

目次

美つつい庵主さん	七
油煙の踊り	五一
線と空間	八一
祈　　禱	一一
もなかの皮	一五
ともしび	二〇

解説　尾崎秀樹

美
つ
つ
い
庵
主
さ
ん

美^うつつい庵主^{あんじゅ}さん

十坪ほどもある広い厨房は、高い天井も太い柱も厚い床板も年代を語って黒光りしている。雪国の建物の特徴だろうか、窓が小さくて採光は充分でないものだから、せっかく行届いた掃除も隅に様々積上げられた箱や罐の雑然としたのに負けてしまつて目に立たない。口やかましい栄勝尼は、だから一度だつて昌妙尼や智円尼の雑巾がけを褒めたためしがないのだった。

けれども観自在におわす観世音菩薩に帰依している尼僧たちは、栄勝尼がどう思うからといってそんなことで働きを手加減するようにはなかった。智円尼は五尺ない短軀を駆って朝から晩まで水汲みと飯炊きに明け暮れている。彼女の飯炊きは既に定評があった。檀家の一人である大竹屋の女将は「明秀庵の精進料理はくるみ豆腐に胡瓜の酢のものがお得意やが、なんにまさは智円さんが炊いた飯やあ」と毎度激賞してくれる。口が悪いので評判の大竹屋が褒めたのだから、こればかりは栄勝尼も異存がない。

「典座といえは僧堂では重い重い位ぞな」典座とは飯炊きの謂いだが、庵主の昌光尼がこういつて励ませば、紀州の漁村で生れ育った智円尼は故郷の海人舟を思い浮べて、自分は明秀庵の命綱を握っているのだと責任を痛感するのであった。

今日も不時の来客があつて、昼飯は朝炊いただけでは不足かと智円尼はすぐさま釜を仕掛けたが、浸しよりの足らぬ米から味の悪い飯を炊かぬ用心で火加減に一層気を配っていた。今年は夏が晩く来て、ことには冬国のことで暑気はまだ遠かったが、さすがに火の傍は熱い。手拭で額か

ら頭へ汗をくるりと拭いたところへ、奥から栄勝がつかつかと出てきた。かまちから窓の前の智円を見下ろして突っ立ったまま、「庵主さまがな、びっくりしてござったぞ」そういうと、大きな口を開けひろげて、あっはっは、と笑った。丸坊主の頭にツイ丈の麻の衣という尼僧の形には似つかわしくない闊達な笑い声だ。

明秀庵に来客といえは大概は檀家ときまっているのだが、今日は東京から庵主の姪の子が訪ねて来たのだった。増井悦子。W大学の文科に在学中という学生である。

悦子と明秀庵とは突然の組合わせではなかった。終戦前、悦子の家は庵主の昌光尼を頼って、しばらくこの庵に疎開していたことがあった。その頃の悦子は国民学校の三年生で、お河童頭の可愛い子供だったが、東京育ちのせいか近隣の子たちよりさすがに早熟で、言語動作すべてに利発さが響くようだった。庵主も栄勝尼も殊の外目をかけて、明秀庵の応量器に貰えぬものかと相談したこともあったが、悦子の母親は「とんでもない」と顔色を変え、終戦間もない折りからであつたが早々に東京へ引揚げて行ってしまった。応量器というのは庵主の後継ぎのことである。「在家の衆は義理知らずじゃ」と庵主は身内と思うから気を許して悪口をいったが、栄勝尼はそれを制して「まあ、仏縁がなかったのじゃろ」と気楽に笑ったものだ。

仏縁というならば悦子には仲々信心の気があったのにと、その後も折りにつけて庵主は姪の子を未練げに思い起していた。子供心に尼僧の生活を相当興味深く観察していた様子だったし、誦經の最中ふと気がつくと思つくと尼僧たちの背後で同じように瞑目合掌して何ごとか呟いていたり、観音經など一章の終りごとに繰返される「かんぜエおんぼ才さアツ」はすっかり覚えてしまつて皆と

一緒に唱和したりしていた。「ええ子じゃったが、母親に信心がないもんでの」

栄勝尼は昌光庵主を心の底から敬愛しているのだったが、優しく雅やかな庵主とは対照的なさっぱりした性格だから、繰言くりごとというのは相手になるのも大嫌いだ。「庵主さまもそろそろ齡をとらしゃった」と慨嘆し、さてそれなら応量器も本腰入れて探さにゃならぬと考えたものだ。

ところでその悦子が、実に十年ぶりで明秀庵を訪れたのだ。前触れは簡単な葉がきで、来春大業を卒業するということ、ついては最後の夏休みを東北地方の旅行に宛てたのだが、途中一度寄らせてもらいたい。細かい予定は立てていないけれども、とにかく御邪魔させて下さい。友人と二人ですと、尼寺の方の都合も聞かぬ通告のようなものであった。

日頃波乱のない静かな日を送っている明秀庵はこの一枚の葉がきですっかり興奮した。庵主は浮かれだして、二階の客間の掃除を自分でやる気で曲った腰に箒ほうきはたきを両手に持って階段を上り、若い昌妙尼をはらはらせる。栄勝尼は一層元氣な声を出して、矮人わいじんのような智円尼と二人で納戸なんどから蒲団を担ぎ出す。東京からの客といえば明秀庵でなくともこの地方では稀まれなことなのだ。「精進料理が口に合うでしうかの」と智円が心配すると、「阿呆あほうか」栄勝尼は「口に合っても坊主が魚の料理は出来んぞ」と当り前のことをさも大事げにいいきかした。

しかし悦子の葉がきにはどう読んでも明秀庵を訪れる日時は書いてなかった。四人の尼僧たちはそれから一週間ばかり毎日を待ち暮さねばならなかった。そして何事も大変のない日を送っている尼僧たちだったから、その間の話題は総て悦子のことに終始していた。

「あの子アいくつになったかの」「二十三じゃろ。昌妙より三つば上じゃった筈はずじゃから」

「はあ。昌妙は悦子より三つ下じゃったかの」「そうじゃろ」「そうじゃるか」

何しろ忙しいということがない生活だから話は何遍同じことを繰返しても滅多にあきられることがない。「昌妙よ、昌妙よ」栄勝尼が天井を振仰いで胴間声どうまごえを張上げると、遠く澄んだ声で二階から「はアイ」と返事がきた。「可哀そうに勉強中じゃろ。呼んではいけないがや」「そうじゃ、そうじゃ。年寄りが耄碌もうろくした齡勘定に若いもん一々呼んではならん」意見が一致したから、栄勝尼はもう一度怒鳴ることになる。「昌妙よ、もう来いでもええぞオ」

悦子が友人と二人で明秀庵を訪れたのは、東京ならば夏の盛りである八月の始めであった。庵の入口の大戸は午前中とて閉っていたが、中の小さな扉は手をかけると訳なく開いた。くぐって入ると手入れの行届いた門口は烈しいばかり明るく、鶏頭の赤い花が二人の眼に痛いようだった。「ご免下さい」門口から見ればまるで暗がりの玄関で声をかけると、智円が「はい」と小さい頭を出した。「悦子です、私」「ああ」叫ぶように応えて、智円は奥に駆け込んだ。

「栄勝さま、栄勝さま」「なんだ、なんだ」「悦子さんです」「おお、着いたかいの」たちまち明秀庵は活気づいた。

庵主の部屋は南向きの客間の隣の縁づたいにある。昌光尼は、老眼鏡の奥で何度も何度も眼をしばたたいていた。悦子が来たとき丁度彼女は厠かわやに入っていたので、客間に落着いた二人の前に静々と立現われるというおあつらえむきの段取りがついてしまったのである。縁伝いに客間へ出て、開け放した障子の向うに悦子ともう一人を認めた途端に、老庵主は吃驚びっくりしていた。

悦子の友人が男であるということとを彼女はまるで考えてもいなかったものであった。「安形昭夫

さんです」と紹介され、「はあ。よろこそ」と咄嗟とつさに挨拶を交わしたが、それきり後が出て来ない。栄勝尼が横から、「大学のお友だちかいの」と訊きいた。「ええ、親友なの」

悦子と庵主が、悦子の母親の近況から始めて親類の誰彼の噂話うわさばなしに耽ふけっている間、安形昭夫は恰好がつかずにもじもじしていた。尼寺というものに対して漠然と抱いていた興味は消えるどころかより強まってさえいるようなのだが、今見るところ尼というには年寄りすぎている庵主や巨怪すぎる栄勝尼からは、彼が前も以て描いていた離俗の尼僧という優雅なイメージは片鱗へんりんも窺うかがうことができないのだった。全く栄勝尼のでこぼこ頭は鎌倉時代の荒法師にだってこんな汚ない坊主頭はなかっただろうと思うようだし、胸はだけた麻の衣はもとはどんな色だったか今は褪あせに褪あせて肩は殆ど白に変色してしまっている有様だ。尼寺といえれば彼には先ずハムレットの台詞せりふが連想されるのだったが、栄勝尼が尼で通るなら美しいオフエリヤにあんなことはいえないと思い、急に可笑おかしくなった。

「お疲れじゃろ。顔でも洗いなさらんか」「はあ」「遠慮なんいらん、いらん。二階に部屋ア用意してあるけに、昼まで一休みしなすったら」「はあ」昭夫の心中を知ってかどうか栄勝尼の親切は積極的である。悦子は夢中で両親の悪口を大叔母に洗いざらい開陳かいぜんしていて昭夫には一顧も与えるどころではない。やむなく彼は立上った。搔かいた汗を流さぬ分にはどうにもならないのである。栄勝に導かれて厨くりやの井戸端に出た。

「さアさ、脱ぎなされ脱ぎなされ。裸になって水浴びなさらんか。明秀庵の井戸は深いけに冷たいぞ」昭夫は冷汗を搔く。禁欲の尼寺に男の身で乗込んで来るまでは若氣の向う見ずで出来たの

だが、その尼からシャツを脱げの裸になれのと いわれると、奇妙な気分襲われて、むしろ当惑するのである。

「さあ智円、西瓜^{すいか}を切れ」「はいはい」「さっきの麦茶ア冷えとらんかったぞ」「それはいけませんでしたな」「西瓜と瓜^{うり}とどっちが冷えとるかの」「どっちも一昨日から漬けとりますで」「なら、いたんどりゃせんか」「二人の尼は真剣な顔で協議しているのだった。

悦子も実はこう歓待されるとは思わなかった。「ほっ」といって下さっていいのよ。昌光さま。要するに東京を離れてぼんやりしたいというのが目的なんですもの、私たち」それは本当なのだ。電車やバスや自動車の警笛など喧噪^{けんそう}で埋まっている都会から離れたいと希^{ねが}い、ようやく明秀庵に落着いてみると想像に違わずここは静謐^{せいひつ}だった。悦子は行儀悪く両手を展^{ひら}げてのびをしてみせた。「いいなあ、田舎って。ねえ、そう思わない」部屋に戻ってきた昭夫に賛意を求める。

「うん、まだ馴れないけど。静かは静かだね、確かに」しぼったタオルを悦子に渡すと、悦子は有りがともいわずに顔を拭いた。「わ、まっ黒。汽車の煤^{すす}ね」

悦子の連れてくる友人が男性であるということはさすがの栄勝尼も考えていなかったもので、二階に一間しか用意していない不備をどうやって始末したものかと迷ったが、「ま、ともかく荷物だけでも二階へ置いて」と智円を呼んで担がせようとした。「いや、僕が持ちます」昭夫は悦子の大型トランクと自分のポストンバッグを軽く持った。「いえ、ま、私が持ちますわな」尼僧は親切を押しつける。横から悦子が「いいのよ智円さん、男ですもの持たした方がいいわ」

階下に残った昌光庵主は、栄勝尼に相談した。「どうしたもんじゃるか」栄勝尼は齒のない口

を開けて、今度は声を立てずに笑った。「今さき智円にいうて笑ったじゃ。庵主さまが、びっくりしてござったというてな」「ほんまに私はびっくりしたぞな」

栄勝尼も庵主同様に驚きはしていたのだが、この二人の老人は外形と同じようにものの考え方もまるきり違っていたから、驚き方も大いに差があったようである。栄勝尼は若いものの大胆と活潑を気に入って悦子の嫌味いやみのない態度に好感を持ったが、庵主は身内の一人のふしだらという具合に解釈して当惑していた。「駈落ちではなからうか」東京へ問い合わせてみようかと思ったのだが、栄勝尼は大きな手を振って、「まさか。他になんぼでも行くところがあるに、今日びの若いもんが尼寺に駈け込むものかや」と庵主の思ひすごしを退けた。第一、駈落ちかどうか様子を見れば分ることだ。悦子にも昭夫にも全く翳かげというものが無い。逃げてきた人間には何がなし後ろ暗いところがあるものなのに。悦子も親友だといって紹介したではなかったか。「親友というのは仲のええ友だちのことじゃろが」「それでも男と女じゃ」

それならばあの二人は恋人同士かもしれないと階下の二人が考え始めたころ、智円が二階から戻ってきた。「ええ部屋じゃと喜んでおられます」「そうか、そうか」台所へ行きかけたのを呼んだ。「智円」「はい」「あの二人は恋人じゃろか」智円は膝ひざをつくと意味不明な微笑を浮べて、霜焼けの痕あとで皮のつっぱった太い指を揉みあわせながら、「さあ。どうでござりまっしょ」彼女も全く見当がつかないようである。「悦子さんはあんな調子ですが、昭夫さんちゅうお人はえらく悦子さんに親切で」「うん」栄勝尼が力強く肯うなずいて論断した。「男が女に惚ほれちよるんじゃろ」「それが自然じゃわな」昌光尼も落着いて言葉を合わしたが、それにしてもこれはどうしたもの

か、ますます当惑している。

同じように二階でも階下の人物について語りあっていた。「見当がつかないね、尼さんの齡つてのは」「庵主さまが七十、栄勝さまが六十、たしかそのくらいよ。智円さんは三十代でしょう」「ふうん」

庵主の昌光尼が七十とは思えなかった。昭夫の予期していた尼僧というものにやや近かったのは彼女だけであつたのだ。美しく潔きよらかという意味では庵主は実に淡い墨絵に描かれるのにふさわしい尼僧だつた。少々枯れていると思わなくもなかったが、「へええ、七十かねえ」「若く見える?」「うん。いや、齡なんて考えられなかった」「肌だけ見ても七十には思えないでしょう?」「うん」信仰生活の神秘を想いかけたとき、「肉食をしていないからよ、きつと」悦子は美容法の見地から結論した。

曹洞宗では門閥そうとうしゅうに生れて、幼時から仏法の修業で育つた昌光尼は、尼として、謂わば毛並がよいのだということ。栄勝尼は、これは正反対の庶民出身、尼では珍しい荒行あらぎようも修めて、若いころ大寺の法要で昌光に廻めぐり合い、仏縁に感じて以来ずっとその補佐をして昌光が行くところ必ず行を共にしている。明秀庵に落着いて、そこで昌光の出世も止ると、彼女も止まって隠持いんじとなつた。補佐役の位置である。「庵主さまはおっとり型で檀家を擱つかまえたり殖やしたりする才覚がまるでないの。栄勝さまが全部切り廻めぐしているわ。彼女はあの通り容貌魁偉かいゐだけれど俗世にいたら女傑で通る人よ。みんな母から聞いてきた知識だけど」

トランクから洋服を出してハンガーに吊つるし鴨居かまどにぶらさげながら、悦子はその知識の有りった